

増殖技術改良試験（ワカメ）

担当者 技師 高橋 邦夫

I 目的

種苗の自給を重点に養殖技術の指導を行う。

II 調査内容

1. 調査場所 東津軽郡蟹田町塩越
2. 調査期間 昭和38年5月～39年3月

III 調査方法と結果

1. 採苗指導

塩越地先のワカメ養殖は本年度から始められたため、5月29日現地で、カキ、ワカメ養殖研究会員及漁協職員に採苗から養殖までについて指導し、6月13日深浦産の成実葉を用いてノレン式採苗器65枚に採苗を行った。又7月6日、種差産の成実葉を用いて研究会員が70枚の採苗を行った。

2. 発芽状況

10月16日の調査では、深浦産の発芽階級はクレモノ糸、シュロ糸とも1で、葉長は0.8mmであったが、種差産は、クレモノ糸の発芽階級1に対し、シュロ糸は4で、葉長はそれぞれ0.25mm、1.5mmであった。12月4日の調査では、いづれも幼芽は発見できなかった。これは、10月16日に採取した種糸を室内の容器に収容して12月5日までおいたものでは、多数の幼芽が認められたこと、及び奥内地先の発芽状況からみて異常海況による芽傷が原因である。

3. 養殖結果

海面培養種苗が芽傷のため使用不能となったので、県海藻指導所の室内培養の種苗を10月24日巻付けにより分散した。本種苗は分散時まで室内で培養し、仮植を行っていない。幼芽は顕微鏡的な大きさで眼では認められなかった。又、11月28日宮城県産の種苗を巻付けにより分散したが、芽付は薄く、幼芽は2～3cmのものであった。

3月25日の調査では県海藻指導所のものは、発芽数が多く密植の状態では仮植をしていないため、生長も甚しく遅れ15～25cmであった。又宮城県産は最大70cmに成長していたが、これも例年から見ると生長が悪く、しかも芽付が薄いため、いづれも収量調査の対象とはならなかった。本年度は陸奥湾の津軽半島側沿岸各地に芽傷みが発生したこと、生長が悪かったため、ワカメ養殖は全くの不振に終わった。

IV 考察と問題点

本年度、異常海況によるものと考えられるが、芽傷み現象によって結果は殆ど得られなかった。このため蟹田地先の海面培養による種苗生産について、見直しは得られなかったため継続検討を

要する。又、室内培養の種苗による養殖を試みたが、仮植を行っていない種苗では生長が甚しく悪く、3月下旬に15～25cmで生売りの対象とならないところから、仮植の必要性を確認できた。

宮城県産の種苗は芽傷み現象もなく生長したが、これは、分散時すでに2～3cmに幼芽が生長していたためと考えられる。(芽傷みは1～2mmの幼芽に最も早く現れ、その後次第に顕微鏡的大きさのものに及んでいった。)従って種苗の分散は肉眼的大きさに達したものを対象とすべきであろう。ただし、室内培養の種苗は顕微鏡的大きさのものであったが、芽が消失することなく生長しており、前述したことと矛盾することになる。

海面培養の種苗は、10月以前に細菌感染等の何らかの障害を受けていたためか否か、この間の理由は明らかでない。